

生涯学習課 NEWSLETTER



福島県文化スポーツ局 生涯学習課

TEL 024 - 521 - 7784

FAX 024 - 521 - 5677

E-mail shougaigakushuu@pref.fukushima.lg.jp

NO.5 H30,9,25

ニュースレターの概要

このニュースレターは、平成27年度に開催された「全国生涯学習ネットワークフォーラム」の後継事業として、震災からの復旧・復興や地域課題に取り組んでいる県内の関係者等の情報を共有し「学びをひろげ、つなげる、いかす」ため、年に2回発行するものです。

また、皆様方からも、日常的な取り組みや様々な企画のもと実施されたイベント等、生涯学習に関する情報ならどんなものでも結構です。多種多様な情報をぜひ当課までお寄せください。

今後も、互いに情報を共有し合い、継続的な取り組みが推進されるよう積極的につながっていきましょう。

ふるさと双葉へ

夢と希望の架け橋に

双葉町は、福島第一原発事故以降、現在まで全町避難が続いている。町民が県内外で避難生活を送る中、毎年、いわき市南台仮住宅広場では、双葉町伝統の「ダルマ市」が開催されてきた。

今回、震災後のダルマ市を主催し、双葉の伝統を継承する団体「夢ふたば人」会長の中谷祥久さんから、これまでの経過や、ふるさと双葉への想い、ダルマ市にかける意気込みなどについて話を伺った。



伝統の力で双葉を元気に

「夢ふたば人」結成

東日本大震災が起きた平成23年の9月、中谷さんは南台仮設住宅に入居した。そこで、双葉町消防団第2分団の仲間とともに町の未来について語り合い、「自分たちが町民に夢や希望を与えられる存在になろう」という思いから、同年11月、「夢ふたば人」を結成し、約2ヶ月で南台仮設住宅広場内でダルマ市を開催した。設立当初のメンバーは、3人だったが、現在は、25人ほどに増えた。住民の再会の場をつくりたい。双葉を感じ、ふるさとを誇りたい。双

次の世代に残したいという想いで活動をしている。「盆踊り」の開催や地域のイベントへの出店にも協力している。



南台仮設住宅広場で開催された盆踊りの様子

ふるさと双葉を感じ、

再会を喜ぶ姿に達成感

ダルマ市は、江戸時代末期から永い歴史を誇る伝統行事。毎年1月、町と長塚共栄会が主催し、長塚商店街をメイン会場に開かれていた。双葉ダルマの特徴は、太平洋と桜と雉。古くから浜通りをイメージしたデザインは人々に親しまれてきた。絵付けは、JAふたば女性部が行っている。

長塚で育った中谷さんは、幼い頃から祭りが大好き。祭りへの思いは人一倍強く、「伝統の力で双葉を元気づけたい。必ず開催しなければという使命感があった。」と話す。

震災後、初めてのダルマ市は、不安を払拭するほどの大盛況。場所は違っても双葉を感じてほしいという思いが通じ、県内外から懐かしい顔ぶれが集まり、涙を流して再会を喜ぶ姿に達成感を感じたという。

今年も2日間の開催で、一年の運勢を占う「巨大ダルマ引き」や商売繁盛を願ひ練り歩く「ダルマ神輿」、「奉納神楽」、「伝統芸能発表」、「アーティストライブ」などで盛り上がった。



新調されたダルマ神輿

伝統を強い絆で未来へ！

平成31年は、町外拠点となる勿来町酒井地区災害公営住宅へ場所を移して市を開催する予定だ。「ぜひ、多くの方に会場に足を運んでいただき、双葉の姿を直に感じてほしい。」と、中谷さんは話す。

「温かい支援を活動の原動力にし、今後も精力的に活動していきたい。町民の心よりどこかを途絶えさせず、必ず双葉でダルマ市を復活させたい。新しい取組を聞かれることもあるが、目指すところはそこではないと思う。」と語っていたのが印象的だった。



威勢のよい巨大ダルマ引きの様子

笑顔で、楽しく、

交流の拠点に！ 「はら笑楽交」

猪苗代湖の西岸、湊町原地区にある「はら笑楽交」は、廃校後、長い間放置されていた旧原小学校を、地元有志らの手により地域活性化や交流拠点を目的として再生した交流施設である。平成29年7月29日にオープンして以来、愛着のある校舎は、人々の触れ合いの場として蘇った。

今回、はら笑楽交プロジェクト実行委員会代表の日下部勝文さんから施設の魅力や取組、今後の展望などについてお話を伺った。



湊町を元気に！

「カフェはら笑」

はら笑楽交の地域活性化のための取組の一つが地元食材を使って郷土料理を提供する「カフェはら笑」の運営。季節によって変わるメニューは地元のお母さんたちの話し合いにより考案される。自慢の一品は、「豆腐もち」。代表の日下部さんは、「最近では、農家でも餅を食べる機会が少なくなり寂しい。湊町の特産品は

大豆。豆腐もちで人を呼び込みたかった。」と話す。カフェを利用した家族での食事や語らいは、世代間の交流を深めるきっかけにもなっているという。現在は、日曜のみのオープンとなっている。



交流拠点「カフェはら笑」

魅力あふれる

「楽交」づくりの追求

今年7月末、はら笑楽交では、「1周年記念イベント」が開催され、約200人の参加者で賑わったという。地元団体の協力による楽器演奏やライブ、語り部のステージ。台風の影響で、予定していたウォーキングや花火、キャンプファイヤーは中止となったが、それでも会場は大盛況。日下部さんは、イベントを企画する際、幅広い年齢層の方が楽しく参加できるように、知恵を絞っているという。

年間をとおして、親子で一緒に参加できるイベントが企画されており、餅米栽培、さつまいも掘り、生

き物調査、ハイキングなどの体験ができる。毎年、「遊雪の楽交（雪祭り）」には、多くの人が訪れる。



田んぼの楽交の様子

幻想的なスノーキャンドル、お昼に振る舞われる温かい芋汁や餅、かまぐら作りやそり遊び、夜の楽交での交流と、楽しい要素が盛り沢山。時間が経つのも忘れ、一日中、雪中での休日を楽しめる家族もいる。

また、平日は、交流スペースと校庭の一般開放を行っており、近隣町村や遠方からの家族連れが訪れる。

夢の実現へ向け、

「楽交」の目指す姿

はら笑楽交の一番の魅力は、高原地特有の気候や恵まれた自然環境。猪苗代湖と背あぶり山の間に



建物が常に存在するのが強み。

日下部さんは、「施設周辺の景観を美しくすることが集客に繋がる。環境整備に力を入れ、毎年、定期的

なイベントを組むことで集客率を高め、リピーターを増やしていきたい。」と意気込む。

また、日下部さんは、地域活性化のためには、若者を地域に取り込む手立てが必要と考え、いろいろな試みをおとして、地元農業法人の担い手を育てていくことが自分に与えられた使命だと捉えている。まずは、未来を担う若者に農業を負担と感ずることなく、楽しいと思ってもらえることが大切であり、そのためにも、交流拠点としてのはら笑楽交の存在意義が今後益々大きくなっていく。

雪まみれになった子どもたちの笑顔。その姿を見て喜ぶ親。イベントを企画する際、自然の中で見せる子ども本来の姿が大変参考になるという。

「サイクリングや屋外スクリーンでの映画鑑賞会、コンサート、ドッグラン」。どんどん挑戦していこうと思えます。」と話す日下部さん。日下部さんの瞳の奥には、未来の「がっこう」の姿が限りなく広がっている。



はら笑楽交施設外観